

米原歴史街道

米原市の歴史・文化財を歩く ⑪

春照八幡神社太鼓踊り

— 変容する伝統芸能 —

五年ぶりに盛大に奉納

農耕社会の日本で水不足は最大の悩みです。思いつく限りの手段・方法で雨乞い祈願がおこなわれました。太鼓踊りは、太鼓や鉦の音で悪霊を威嚇し、踏み鎮める信仰から疫病送りや虫送りに用いられ、雷鳴に似ることから、打ち鳴らすと雨の神が錯覚して降雨をもたらすという趣向です。

太鼓踊りが多く伝承されている滋賀県でも、伊吹・山東地域はとくにその分布が濃密で、現在でも九つの



▲ 奴振り

一年（一六七一）の干ばつから始められたといわれる、農民たちの雨乞い由来の踊りです。ただし、現在踊られているのは、豊作に対する返礼の踊りです。伊吹山麓の太鼓踊りは踊り手が多いのが特徴で、とくに春照と上

地区で太鼓踊りが踊られます。また、伊吹山を挟んだ岐阜県西濃地方でも同様の太鼓踊りが伝えられていて、揖斐郡の太鼓踊りには「江州から習った」といわれるものや、かつて山を越えて太鼓の貸し借りをしていたことなど、伊吹山をとりまく「太鼓踊り文化圏」としてのまとまりを見ることができません。

秋晴れの九月二三日、春照の八幡神社で太鼓踊り（県選択文化財）が五年ぶりに奉納されました。寛文十

野は総勢二〇〇人にもなります。春照では大名行列を模した奴振りや、雨乞いに関係する山伏や法印、大団扇などが参加する道行は壮観で、神社境内では太鼓踊りが盛大に奉納されました。

太鼓踊りに加わる趣向

太鼓踊りの中心は太鼓や鉦、音頭ですが、奴振りなどは、明治以降に人目を驚かす趣向として加わったものと思われまます。春照は北国脇往還の宿場町で、江戸時代には北陸や湖西の大名が参勤交代で通っています。奴振りは、小粋で見栄を飾った大名行列の先払い役で、多くの村で祭礼に奴振りを取り入れまました。お腹に絵をかくのは全国的にも春照だけだそう、昭和四二年の奉納から始められたようです。

山伏や法印は、ある干ばつ年の年に数人の山伏が春照宿を通り合わせ、村人に雨乞いを依頼されたところ、雨が降ったことから行列に参加しました。また、伊吹山の弥高寺の山伏との関連もうかがうことができます。寺社奉行は、幕府の宗教行政司法機関です。昭和四〇年ごろに的場松平さんの発案でくわえられた役方といわれています。



▲ 大団扇

なかなか注目されませんが、道行の最後尾を「返礼踊」と大書された大団扇が行きます。明治二六年の記録には、団扇二五人と六種類の寸法が示され、最大は長さ一丈六尺（約四・八メートル）、幅四尺二寸（約一・二メートル）の六本です。赤地の渋紙が張られ、銀紙で縁取りをし、五色の布をてっぺんから垂らし、白布で背中と腰にくくり、前に太鼓をつけて踊ったといわれています。そして、この大団扇は、太鼓打ちが前後に体を振って踊ることで、団扇が風を起こし、雨をよぶ趣向です。この大団扇は、かつて大野木や藤川、いまでも揖斐郡の谷汲踊りなどで背負う「ホーロー」「シナイ」「バンバラ」などの鮮やかな背負い物に変化しながら伝播していきます。太鼓踊りは趣向を凝らし変わっていくのです。

（歴史文化財保護課）